# 腕木信号機、中央集権的国民国家、帝国

瓜　生　洋　一

# Telegraphe, Nation-State, Empire

Yoichi URYU

ただ今、ご紹介にあずかりました瓜生でございます。貴研究所に招かれ、大変名誉に感じております。どうぞよろしくお願いいたします。

ご案内のように、フランス革命をいろいろな角度から見る視点があるわけですけれども、私は、ここ10年来、腕木信号機という問題から考えてきました。おそらく腕木信号機ということば自体初めてお聞きになると思われます。そこで、何枚かのイメージを見ていただき、その上でレジュメに沿って資料を使いながらお話ししていこうと思っております。

まず、これからお話しする腕木信号機と、研究所のテーマである「地域・中央・帝国」とはどこで結びつくのか、疑問に思われる方も多いかと存じます。私は、長い間腕木信号機を調べてきて、腕木信号機の研究テーマと研究所のテーマと合致したものだと考えましたので、報告をお引き受けいたしました。

腕木信号機ということば自体耳慣れないのは、当然でして、歴史研究でも一般向けの本にしてもあまり見あたらず、朝日新聞出版社から出た『腕木通信』という本が唯一の日本語の本と言ってよろしいかと思います。

まず、図1をごらんください。腕木信号機は、こういう形をしております。腕木信号機の通信線は、1794年に実際にパリと北方の都市リールとの間（約300km）に建設されました。その後も改良が重ねられ、諸方に通信線が敷設されました。ナポレオン期にはイタリアへ向かって情報通信をするためにアルプスを越え、ミラノまで通信線を引きまして、そのときに使用したのがこういう1804年の模型となって現在残っております。

腕木信号機自体、高さが5メートルから10メートルあります。さらに、基盤になっているところも、丘の上であったり、高い建物、例えば、教会の尖塔であるとか、そういったところですから、地上数十メートルに及ぶ可能性もあります。この上に大体5メートル近い支柱が立ちまして、ここに図1の主軸（a-a’）という横軸が1本取り付けてあります。その両端に副軸を2本（a-b,a’-c）つけまして、3

本の軸があります。これを、下のほうで、それぞれの軸につながるハンドルで操作し、3本の軸がそれぞれ独立して動くようになっています。ですから、3本の軸を組み合わせていろいろな形がつくることができるということであります。

これはフランス革命の最中につくられ、そして復古王政期、さらに7月王政期、第二共和政期にも利用され、ようやくモールス式の電信が導入された1850年代に至って廃止されることになります。つまり60年近くにわたって使われたものでありました。決して冗談でやっていたわけではないのですけれども、こういう話をしますと大抵の方に「おまえは本当に物好きだな」と言われて非常に落ち込んでいるのです。しかし、お考えいただきたいと思うのですが、それまでの情報通信のあり方と根本的に違ったものがつくり出されたということをまずお話ししておきたいと思っております。

腕木信号機の通信線は、最盛期には総延長およそ5,000 km（図6）ありました。フランスの南北、東西がおよそ1,000 kmと考えますと、その5倍という距離になります。その信号線の間におよそ600カ所ぐらいのステーション、信号所がつくられました。ある意味で言うと、モールスの電気信号機が導入されるまで、腕木信号機による通信はフランスの情報通信の花形という時代でありました。

ではどうやって伝えたかと申しますと、図5をご覧下さい。平均10 kmから15 kmの彼方から、隣の信号所が形作る形を望遠鏡で見まして、そして隣の信号所が腕木をいろいろ動かすのを隣の信号所の望遠鏡で見ます。その見た形をそのまま次の信号所に伝えていく。言ってみれば簡単な原理です。手旗信号の大型版とも言えましょう。図2は、腕木の形が1、2、3、4、5、6…、そして0までの10個の数字を表していることを示しています。送信する場合、暗号簿を使って、平文の単語・単文の塊→各塊を暗号簿の1から9999までに割り当てる（換字式という）。例えば、1という数字を送ると、どこどこへというようなa、英語で言えばtoというような訳語を当てることになっています。では1番目に送ったのと2番目に送った信号はどこで区別されるかというと、図3をご覧下さい。独立した単語を表す腕木の形の最後に特別のひげみたいなものをちょっとつけます。そうすると、ここで切れるよというストップ信号になります。ですから、例えば3、4、6でストップ、そして次は2、3でまたストップという形で送っていく。そして受け取った側がその暗号文を見れば、最初が346、次に23の2つの数字の塊となり、これを受信用暗号簿で見ると、たとえば346はリール、23はパリに対応するとなります。逆も同じ手順で平文→暗号簿を使って数字化→腕木の形に変換→リレー式に信号所を通過する→受信局→数字化→暗号簿を使って平文にする。

初期の暗号では、いろいろ問題が起こりました。そこで1803年以後、大体ナポレオン期に重なってくるわけです。従来の10個の暗号を92個の暗号にしたわけです。どういうことかと言いますと、腕木の形にこれまで通り1から0まで数字を当てていき、これを組み合わせて1から92までの数字を構成します。そうしますと、暗号簿がありまして、その暗号簿のページが92ページまであり、各々のページが92行の行数になっています。

そうしますと、例えば何か情報を送りたいというときは、大体4桁の暗号で送ります。一番わかりやすいのは1、2、3、4といたしますと、最初の2つの数字が12ページ、3、4というのが34行を見なさいということで、そこを見ると「敵が」とかいうふうに書いてあるということなのです。非常に単純な原理なのですけれども、これは非常に有効でありまして、かなり長い間使われておりました。

実は、この4桁数字というのは私が確認した限りでは19世紀の終わりまで、もちろん電信の段階ですけれども、各省庁の間のやりとりの暗号簿というのが出てきました。これを見るとやっぱり4桁数字でやっています。全く同じです。フランスというのは暗号に関しては非常に保守的だなというのを私は思ったわけであります。

フランス人の中には大変物好きな人も本当にいるわけでありまして、フランス東部、ストラスブールに近いところにサヴェルヌというところがあります。ここの丘の上に、腕木信号所を再建しております。また、サヴェルヌ以外にも全国に十数カ所の再建された信号所があります。

私は、実際にサヴェルヌへ行きまして、設置された望遠鏡で、10㎞くらい先の隣の信号所を見たのですけれども、とてもその形までは見られませんでした。当時の人たちはよほどに目がよろしかったのではないかと思います。この信号機のことをテレグラフ・オプティック telegraphe optique と言います。tele は遠くですし、graphe は書くということです。つまり遠くに意味のある文字を伝達して書くという意味です。オプティックというのは眼視式と訳した方がよろしいでしょう。日本語で翻訳されているときは光式信号機とか書いた人がいますが、オプティックの訳にはもちろん光もありますけれども、目で見る。目で見て、そしてその形をずっと伝えていく、そういう信号所を建設していったということであります。図5は、通信線の模式図です。これは当時の絵なのですけれども、手前に第1信号所があって、左の丘の上につぎのA信号所をつくってもいいのだけれども、Bのほうに第2信号所をつくった。なぜかというと、先ほど申しましたように、第1-第2信号所はちゃんと見ることができますが、第3信号所からは見ることができません。第1信号所から第2信号所、そして第3信号所というふうにずっと伝わっていくように信号所を建設していったのです。山だとか丘だとかがあればよろしいのですけれども、それがないときはどうするかというと、先ほど申しましたように、教会でありますとか公共建築物の上に立てる。一番私が驚いたのは、モン＝サン＝ミッシェルをご存じだと思いますけれども、あの一番てっぺんにこの信号所をつくったことがあるわけでありまして（ブレスト線）、そういう意味では非常におもしろい歴史でもあるわけです。

図4が史上最も有名な通信文で、初めて腕木信号機を使って最も劇的な情報が伝わった、その原本の一部であります。これはパリ・ヴァンセンヌにある陸軍省文書館にあるものです。1794年北部方面でオーストリア軍とフランス軍が戦った。オーストリア軍はベルギーからずっと南下して、コンデとか、あるいはヴァランシエンヌとか幾つかの都市を占領しておりました。これをフランス軍が攻めまして、ついにコンデという要衝を奪回した。これは当時連戦連敗のフランスにとっては実にすごい

ニュースだったわけです。それが、しかも当時の議会、国民公会と言いますけれども、そこに一気に伝わってくるわけです。そうするとみんな大感激しまして、「すごい」ということになったわけです。実はこれは余りいい出発点であったかどうかわかりませんけれども、しかし瞬時にして、パリから北のほうコンデまで160㎞ぐらいでしょうか、そこからこういうニュースが一気に伝わってくるということで、議員たちは大感激したわけです。早馬でも2日かかるのに、これほど重要な軍事情報がその日のうちに伝達されたということで大変有名になったものであります。

先ほど申し上げましたように、この腕木信号通信線は、最初は北部へ向かって、つまり対オーストリア戦争の最前線でありましたベルギー、それからオランダ方面、さらにドイツ・ライン方面へと展開していく。フランス側の最前線の都市としてリールというところがあります。パリからリールへ向かって大体300 km ぐらいの距離があります。

この有用性が非常に認識されるようになったのでリールからダンケルクにつなぎ、さらにパリからずっと東のほうのストラスブール、これは対オーストリア戦争の非常に重要な戦線の1つになってきましたから、ここに線を引っ張ります。それから、そこから支線が出ます。さらに今度はパリから先ほど申しましたノルマンディとかブルターニュのほうを通って、ブレストというところがあります。ここは軍港です。ここまで通信線を敷設しまして、この中途にモン＝サン＝ミシェルがあるということであったわけです。これが大体1799年の段階であります。ちょうどナポレオンが統領になる時期であります。

1794年頃、ルーブル宮の一角を公安委員会が占めておりました。公安委員会というのは、革命中期の議会のもとの委員会ですけれども、これがほとんど国政の全権を握っていくわけです。公安委員会に直属し、情報伝達を迅速にするためルーブル宮のてっぺんに信号機を取りつけまして、次にモンマルトルの丘に次の信号所をつくりました。そしてさらに北へずっとリールへつなげていったわけです。

こうしたものがつくられていった背景には、やはり危機的な状況の中で、情報というものが非常に重要であった。しかも、情報の伝達速度が大変重要なものとして意識されたのです。それは次の3点の迅速な情報伝達の必要性を中央政府は認識したのです。第1が民衆の情報伝達との対抗、「追い抜き」、第2に軍事情報、第3に行政・政治情報です。いずれも国民国家形成に当たって中央集権体制を築く上で必須のものでした。

第1の点では、図6をごらんになりますと1789年7月20日過ぎ、フランス全国の三分の二の地域で驚くべきパニックが起こりました。第2，第3の点では、革命期を通じて重要でありました。ナポレオン期になりますと、軍事、政治・行政に加えて占領行政が重要になります。そこでこれまでナポレオンが征服したオランダのアムステルダムまでつながります。さらにリヨンまで延ばして、リヨンから今度は東のほうに、つまりアルプスを越えましてトリノ、そしてミラノ、それでベネチアまでつなぐわけです。これは果たしてどれほど実際に使われたかわかりません。特に冬期はとても無理だっ

たと思うのです。なぜかと申しますと、目で見ているわけですから、雪に閉ざされたようなところでちゃんと見られたかどうか、これは記録をもう一回調べてみなければいけませんけれども、理論的に言えばそういうことであります。有名な事例が、ナポレオンの息子がローマ王になるわけですけれども、そのニュースをもちろん全国に伝えますけれども、同時にイタリア戦線にまで伝えるというようなことが起こったわけです。しかし、ナポレオン帝国は崩壊するわけです。

ナポレオン帝国が崩壊した後、通信線が外国へ出るということは連合国側から非常に厳しく禁止されましたので、腕木信号機の通信線は、アルプス - ミラノ線、オランダ線が廃棄されました。今度はリヨンから南進しまして、マルセイユを経由してトゥーロン、これは地中海における重要な軍港です。それで、ブレスト線、それからストラスブール線、それからリール。今度は新たにスペインとの関係が非常にいろいろな形で出てきますので、バイヨンヌまで延ばしたわけであります。

これがだんだん 1830 年代、7 月王制期になりますと、いろんな支線が出てきまして、例えばアヴィニヨンからモンペリエを通ってボルドーまでつながる。それから、ここには盛りきれませんけれども、さまざまな支線ができまして、そこから次々と情報を伝達してきます。例えば私が確認したのでは有名な 1848 年の第 2 共和制大統領選挙ですけれども、このときの選挙結果というのがまとめられて報告が入る。それは、この段階ですから一日がかりとかではなくて、もっと早く伝達されて、中央は、当時の内務省ですけれども、地方の政治・行政情報を迅速に掌握していたという形になります。

いつごろまで使われたかということになりますけれども、少なくとも写真で残っているのはクリミア戦争のとき、1853 年から 56 年において、前線のいわば通信所でありますけれども、テントの上に信号機を仮設しているという状況です。もちろん移動していくわけです。これをフランス軍が使ったわけであります。さらに植民地アルジェリアです。1830 年以降、だんだんフランスの植民地化が進んでいくわけですけれども、この中でアルジェとアトラス山脈のほうにつないでいく線というのは軍事的に展開していくのに非常に重要な線であったわけです。アルジェに集まる情報を、アルジェからマルセイユへ向かって船で伝達しまして、そこから今度は腕木信号機でパリへつなぐという形になっておりました。

私がこの問題に着目した 1 つの大きな理由というのは速度と政治という問題でありまして、要するに広大な国民国家ができる。その中で、本当に周辺地域で起こっているさまざまな問題というものを中央がどのように掌握したのかということを考えたときに、私は、フランス革命以後、あるいは腕木信号以後というのは非常に重要な段階を画しているのではないかと思われます。

と申しますのが、これは当時、フランス革命前ですけれども、18 世紀にはもうかなり郵便制度が整ってきたわけですが、そこで主に使われておりましたのは郵便馬車であります。二頭立ての馬車が使われておったわけであります。この馬車で郵便を運ぶ。もちろん政府関係文書も別立ての馬車で運びますが、多くの人々の普通の民生用の郵便物も運ばれました。ここら辺にパリとリールは、駅馬車

で大体片道2日かかるわけです。そうしますと、例えば王権が当時ヴェルサイユにあったわけですが、ヴェルサイユから何らかの決定が周辺へ向かって送られていくという場合、たとえ近くても、そしてまた非常に整備されているといえども片道3日。さらに今度は、ご想像いただきたいのですけれども、ピレネー山脈の近所であるとか、あるいは地中海方面であるとかとなってきますと片道9日ぐらいかかる。当然その間にはずっと駅がありまして、馬を付け替えながら次々と伝えていくのですけれども、しかし大変な時間がかかってしまう。そうすると、私はこれをタイムラグの政治と呼んでいるのですけれども、発信する側も受信する側もタイムラグが当然頭の中に入っていまして、例えば10日ぐらいかかって来た。そして何らかの執行をやって、そしてその結果をまとめて送り出すというと、一番僻遠の地でありますと1カ月ぐらいは当たり前になってしまう。そうすると、既にそのときには新しい事態が起こっているかもしれない。こうした状況を伝えていく情報通信のあり方というものは馬に依存せざるを得ない。当時それ以上のものはありませんから、フランス革命が起こる、そしてフランス革命の最中も大体こういう形で人々に伝えられていったわけです。

アンシアン＝レジーム期には、中央からの決定が伝えられていったのは2つのルートがありまして、1つは地方長官という大体30人ぐらいおります。ここへ向かって中央の王権から文書が行きます。それ以外のいろんな法律だとか国王の命令がどのように人々に伝わったかといいますと、教会のルートを使うのです。教会のミサのときにこれを読み上げて、場合によってはフランス語を使っていない土地もありますから、神父さんがいろいろ説明を加えるといったようなことで人々にも伝えられるということになっておりました。しかし、その間には、先ほどから何度も申し上げておりますが、タイムラグが存在した。これをちょっと頭に置いていただきたいと思います。

当時は、駅馬車と訳してもいいのでしょうけれども、乗合馬車が走っておりました。パリからの所要時間の地図を作成してみるとリールあたりはやっぱり3日ぐらいかかります。フランス南部あたりになりますと9日ぐらいかかります。もちろんその間に馬を付け替えながら行きますから、駅が宿舎にもなっていて、人々はそこに泊まる、こういう旅館を兼ねたような駅が全国にあったわけであります。そうなりますと、フランス人がバスティーユが陥落したということを知り得たのは一体どれぐらいかかったかということもご想像いただきたいと思います。私たちはパリだけをぱっと見ていますからバスティーユ陥落もすぐわかりますけれども、では、端っこの人たちはいつごろわかったのかということです。それは政治や、あるいは行政その他に何の影響もなかったのか。私は、もっと本質的に問題があったのではないかということを考えたわけです。

絵を使って腕木信号機の概要を説明して参りましたが、これから腕木信号機とフランス革命、中央集権的国民国家形成、帝国との関係を考察して参ります。

## 1. 腕木信号機と中央集権的国民国家

私は先ほど申しましたように、腕木信号機の問題をどのような視角から見ていくのか、非常に悩んでおりました。ある人に言わせれば、瓜生さんというのは本当に物好きだねというようなことを言われていた時代が長かったものですから。ただ、今回こういう機会を与えていただいて、もっといろんな視角から考えようということで、少しまとまった部分もありますし、そうでもない部分もありまして、それらをあわせてご報告して、皆様のいろんなご意見をいただきたいと思います。

その視角としまして、一般的にいって政治・行政における情報のサイクル、伝達過程、その速度ということが重要であろうと思われます。これは構造的に言えば、どの時代においても同じでありまして、情報の発信、伝達、受信、審議、決裁、発信、伝達と。そしてまた受信し、審議し、実施し、結果を発信と、こういうトータルな過程というものがあるということはどんな国家においても当たり前のことであります。私は、その具体的な相貌を明らかにしていくべきではないか。ひたすら制度史の中に埋没するのではなく、アンシャン・レジーム期はどうだったのか、フランス革命期はどうだったのか、そう思って調べてみると、トータルな情報のサイクルに関する研究というのは余りなくてというか、ほとんどなくて、制度史で終わっているのです。中央には国王顧問会議があり、地方には地方長官がいてというようなことはわかるのですけれども、その間でどういうやりとりをしていたのかとか、そういったことについてはどうもよくわからないということがありました。ですから、政治・行政制度論から情報過程論へというようなことを考えたらどうだろうかと考えました。情報伝達の速度を重要視するということです。これはもちろん伝達される情報の量、それから質、それから情報伝達先、こういったことをまとめて考えていくと、情報による権力の発生ということが考えられないだろうか。特に、国民国家という非常に膨大な領土といいますか、国土、距離、そして面積、こういう物理的な限界が常につきまとうわけです。

物理的限界といえば、私たちにはなじみのことですけれども、いわゆる直接民主制は近代国民国家においてはなぜできないかという問題でしょう。それは国土が余りにも広くて、人々が散在していて、一カ所に集まって直接的に議論することはできないからだということを言われて、そうか、じゃあ代議制だな、代表制だなというふうに納得してしまうのです。しかし、もし、情報通信が非常に速くて、そして人々が幾ら散在していても、その人たちの情報がどんどん伝達されていくとするならば、距離や、あるいは面積といったような物理的限界は越えられるのじゃないか。これが私にはいつも疑問に思われていたわけであります。

ホブズボームによると、バスティーユ陥落の報道は13日以内にマドリッドの民衆に到達したが、パリからたった133㎞のベルンヌでは、パリからの報道は7月28日になってようやく受け取られた。したがって、1789年の世界は、そのほとんどの住民にとっては計り知れないほど巨大であった（『市

民革命と産業革命』（岩波書店、1968年）p.14）。また、地球のそれ以外のところは政府事務官の問題であり、噂の種なのであったとあります。しかし、その噂の種が恐るべき結果をもたらしたということを先ほどごらんいただけたと思います（大恐怖の地図参照）。

私は、昔ホブズボームの本を読んで、妙に記憶に残っておりました。それと同時に、私は小さいときにデュマの『モンテクリスト伯』を読みまして、その中に、この腕木信号機が出てくるわけです。その信号機が実は自分を陥れた人々に対するモンテクリスト、つまりエドモン＝ダンテスの重要な復讐の武器になっています。彼を陥れた人々の中の1人がダングラールという銀行家がいました。いろいろ政府に集まる情報を内閣官房が集めるわけですけれども、その官房からダングラールは情報を得ている。ダングラールはその情報をもとに相場をうまく動かし、巨万の富を得ていったのです。ところがモンテクリスト伯に買収された信号所の職員が故意に間違えた情報を送る。これは、スペインの国内情勢にかかわる情報です。スペインが非常に不安定になっている。だから、官房の一員から「あなたはスペイン公債を買っていますね」と聞かれると「はい」徒応える。「あなた、それをすぐ売りなさい。スペインで大変なことが起こっていますよ」ということで、たちまちダングラールは、スペイン公債を売ってしまうわけです。そうすると、何とか売り抜けて助かったと思っていたら、翌日、これは霧による見誤りであって、そういうことはなかったということで、ダングラールは、大変な大損を被ってしまうわけです。そこからダングラールの没落が始まるというお話なのです。私は小さいとき、実に痛快な話に興奮したのですけれども、この信号機というのがよくわからなくて、何だろうと思ってずっと疑問になっておりました。実は先ほどご紹介がありました二度目の留学のときに、これを解き明かしたいと思いまして、いろいろ文書館を回って調べていくと腕木信号機だったということがわかりました。これはモンテクリスト伯の言葉です。「私はときどき道の端の丘の上で、天気のよい日に、大きなカブトムシの足のような黒い折り畳み式の腕が持ち上がるのを見たことがあります。」これはデュマだけではなくて、ヴィクトル・ユゴーだとかいろんな19世紀の著作家は結構腕木信号機に言及しておりまして、同じように何かカブトムシみたいなとか、巨大な虫のようなというような表現を使っておりました。そして腕木信号機を調べる中で、年来私が疑問に思っていた政治と速度、国民国家と情報の速度、それによって距離や、あるいは面積といった物理的な限界というものを越えていく可能性というものを我々はどう考えたらいいのだということを考えるようになりました。

私はフランスの革命期が専門分野なのですけれども、少し範囲を広げまして、アンシャン・レジーム期、つまり革命以前の時代においてはどのような遠隔通信が行われたのかということを見てみます。アンシアン・レジームはまさに家産制国家でありまして、私文書イコール公文書ということなのです。これにつきましては二宮宏之さんの「フランス絶対王制の統治構造」（『近代国家形成の諸問題』p.227–8、木鐸社、1979年）の中にあるのですけれども、要するに私文書でやりとりしているわけです。つまり中央の王権と地方に派遣している地方長官との間でやりとりしているわけですけれども、これ

は全部書簡の形をとっています。しかも、この書簡はいわば私文書。今のように公私の分別がありませんから、結局、自分で受け取った手紙なんかを辞めるときに全部持って帰ってしまうのです。そのまま自分の財産にしてしまうのです。その財産にしたものが代々伝えられていくというような形になっておりまして、この時代におけるいわば情報通信というものの私的な性格というものがよくわかりますし、王権の中における情報通信というものが果たして統一的な、いわゆる絶対主義的な意思決定にどのようにかかわっているのかということについて私はまだ十分解明できておりませんが、恐らくは中央の国務卿たちが大体、大きな情報を握っていたのではないか。だから、国王に伝わっていく国務会議に出されるものも、かなり選別されていたのではないかと思われます。

大体 17 世紀ぐらいから、リレー伝達式の駅が全国につくられまして、郵便も確立していったわけで、そこを公文書であるとか、あるいは私文書がどんどん伝わっていくのですけれども、どうも公文書という感覚がなかったらしいということがだんだんわかってまいりました。

次に、オリヴィエ＝マルタンによると、中央から四交替尚書という人たちが所管しており、地方に向かって王の命令などを送るということを明らかにしています（オリヴィエ＝マルタン『フランス法制史概説』（創文社、1989 年）p. 676–677.）尚書は、書簡の宛先に従って配分する。これにより飛脚または早馬の派遣が楽になる。各地へ向かって馬で伝えるということになっていったということです。

それから、ムーニエによれば、受け手の側である全国でおよそ 30 人の地方長官の勤務ぶりを明らかにしています。制度史的に見れば、まさに国王の手先とも言える官僚です。地方長官は、国王によって任命され、そして任期制です。ですから、それまでの官僚とは違いまして、まさに国王の直轄官僚なのですけれども、彼らは地方において非常に勤勉に働いているわけです。そのうちの 1 つの話として、月曜日と土曜日の朝、郵便物に目を通すというのが出てきます。これは先ほどマルタンのところで言いました、王権の側から送り出されたものを大体月曜日と土曜日の朝、受け取って、それを見るということになっているらしいということがわかってきました（*R. Mousnier, Les Institutions de la France sous la monarchie absolue*, II, P.U.F., 1974. p. 525–526）。しかし、制度から見て中央集権制であっても、国王の意のままに、即座に国王の意思を実現することは、不可能であったことはおわかり頂けると思います。タイムラグの政治が支配していたことをご承知おき下さい。

要するに私が申し上げたいのは、タイムラグの政治といいますか、中央から送り出して 1 週間とか 10 日かかってやってきたものを、それも毎日送られてくるわけではなくて、週に 2 回程度受け取って、そしてそれを読んで、なるほど王様はこういうふうに考えているのかということで実行する。その結果をまた報告を出すということのようであります。その間には、場合によっては数週間、あるいは 1 カ月、2 カ月といったようなタイムラグが生ずるということは容易に想像がつくところであります。

「絶対王政」は、制度的には中央集権国家で、地方の隅々が中央政府に完全につながっている。しかし、数週間の間は、地方が独立した状態、孤立した状態にとどまり、日々の決定・実施は、地方長

官の才覚に任されていたと推測されます。アレクシス＝ド＝トクヴィルが、アンシアン・レジームを中央集権国家と喝破し、中央集権国家という相で、アンシアン・レジームと近代国家が連続しているという考えを提起しています。大変刺激的な考え方ですが、制度という視点からはその通りかもしれません。しかし、情報過程論という視点から考えてみますと、いささか無理があるように思われます。

ところが、革命期になりますと、これが大きく変わってまいります。まず第1に、これまでの公的コミュニケーションネットワークが崩壊いたします。今申しました国王と地方長官との間のやりとり、あるいは教会を通した民衆への情報伝達というものがほとんど寸断されてまいります。各地の駅が成り立たなくなってくる。あるいは国王の命令といったものが十分伝わらない事態が大いに出てくる。地方の人々はなにが中央で起こっているかわからない。そこで、代替コミュニケーションと私は呼んでいますけれども、公式のものに代わるコミュニケーション網が発生いたします。

例えば、一例を挙げますと、ヴェルサイユに招集されております全国三部会代表が地元へ向かって手紙を書くわけです。その手紙を運んで地方都市に郵便馬車が到着いたします。到着しますと、もちろん名宛人に向かって持っていくはずなのですけれども、そこにその土地土地の人たちがみんな集まってきまして、何がヴェルサイユで起こっているかを知りたいから、直ちにその手紙を開けて読めということを要求します。そこで読み上げる。読み上げて、なるほど、こういうことがヴェルサイユで起こっているのかということがわかる。それに対してまた人々は、ではどうするかということを決めていくというプロセスが始まっていくわけです。つまり、いわば民衆の政治参加というものが情報を介して行われていったということも申し上げたいわけです。

ところが、これは、公式の情報伝達網が崩壊し、代替コミュニケーションが機能しなくなるときが来るわけです。それは何かと言いますと、先ほど申しました1789年7月14日以後です。図7をご覧下さい。7月14日、パリでは民衆がバスティーユを襲って、それからフランス革命が始まったということになっているわけです。ところが地方の人たちは、一体パリでなにが起こっているか、それがなにを意味するかということがわからないわけです。それどころか、この以前からいろんな噂が飛び交っておりまして、これはとんでもないことが起こるしるしだと考える。敵が、例えば当時のアルプスの向こう側のイタリアから、イタリアは統一王国ではありませんけれども、1万2,000名の兵隊が攻め込んできた。それだけではなくて、土地土地の山賊だとか夜盗と手を組んで町々を焼いているとか、乱暴狼藉を働いているとか、そういったような噂が一気に広まっていくわけです。それこそ7月の20日前後には、例外的にかなりの領域にバスティーユ陥落の話が伝わるのですけれども、しかし、それと同時に一気に、今風の言い方をすればデマですけれども、これが伝わります。その速さたるや、すさまじい速さだったわけです。この早さというものの計測は非常に困難です。けれども、全国の3分の2が一気にパニックに陥るという事態です。それも20日前後から24〜25日ぐらいまでのわずか1週間も満たない間に全国がパニックに陥ったわけです。この早さというものがいわゆる民衆のネット

ワークの速度。これは非常に大きな問題にこれからのしかかっていくわけです。つまり全くコントロールされていない。政府や、あるいは議会が全くあずかり知らないところで恐るべき情報が伝達される。それだけではなくて、この噂を聞きつけた民衆は領主の館を襲ったりする。それで領主たちはどんどん馬に乗って逃げていくわけです。そういった事態が起こる。うわさが民衆をそこまで駆り立てたわけです。うわさの下地になったのが、「貴族の陰謀」という伝統的な恐怖の観念です。

このように地方でパニックが起こるだけではなくて、そのニュースは全国から今度は当時全国三部会へと伝わるわけです。全国のパニック状況、あるいは城館襲撃の報が伝わりますと、全国三部会のでは「えらいことが起こった」ということになって、8月4日の夜、全国三部会で、これは当時国民議会と名乗っていますけれども、有名な封建的特権の廃止を決めてしまうわけです。つまり、民衆がなぜ、あるいは農民がなぜ領主の城や館を襲っているのかわからない。彼らは封建的な特権に対して非常に反感を持っているのではないかというふうに考えた。最初は軍隊で鎮圧しようとしたのですけれども、全国が一種の暴動状態になっていますから、これは軍隊ではとても無理だということで、人々の要求を受け入れざるを得ないのではないかということで封建的特権を廃止してしまうわけです。

ところが、今度はそれを伝え聞いたというか、それが全国に伝わっていくのですけれども、今度は聞いた側が、なぜそんなことが起こったかわからない。どんどんずれていくわけです。つまり中央と地方が、いわば情報伝達の問題をめぐってズレが生じてくる。私はこのズレというのが非常に重要だと思っております。それまでのタイムラグの政治ということの小差ではないか、と思います。

例えば、さらに組織的な代替コミュニケーションが発生します。自発的な民衆協会というのが全国各地で、いろいろなところで結成されていくわけです。1,000 以上と言われています。この民衆協会というのは、さまざまな傾向を帯びておりました。ごく穏健な人々が中心になっていることが多かったのですが、中には、革命を遂行すべきであるとか、あるいは法律を実施しろとかというようなことを議論する民衆協会もありました。その中でごく初期から地方代表を集めて、後にパリに移動したジャコバン修道院というところに入ったクラブがありました。これが後にジャコバン・クラブになるのですけれども、当時は憲法と自由の友の会という名前でした。このクラブは、その規約で、全国で似たようなところがあったら加盟をさせることになっておりました（ジャコバンクラブの規約（1790年2月採択）では、

1　国民議会で決定されるはずの諸問題を事前に議論する。

2　憲法への同意とその確立のため専心すること。

3　<u>フランス王国において結成される同じ種類の協会と連絡を取り合うこと</u>。

加盟させるとどうなるかといいますと、ジャコバン・クラブに向かって、地方のほうからたくさんの情報がどんどん上がっていくわけです。ジャコバン・クラブは議会討論のためにいろんな議論をしますし、それから議会でさまざま討論した結果もちゃんと握っていますから、それを今度は自分のと

ころに加盟しているところにどんどん送るわけです。そうすると、同じ土地に3つも4つも民衆教会があっても、ジャコバン・クラブに参加している民衆教会は中央の情報が正確に伝わってきますから、非常にステータスが高いわけです。ところが、ほかのクラブはそういう手段を持たないですから、ある意味で言えば、そこに一種の格差ができてくる。情報の格差が生まれてくるわけであります。

また、ジョコバン・クラブの権力の中枢は何だったかというと、クラブの中に通信委員会というのが設けられたのです。ここは非常に重要です。つまり加盟した名宛人を知っています。今のインターネットのメールアドレスみたいなものなのですけれども、名宛人をちゃんと知っていますから、どこどこに連絡すればこういった問題がわかるということをちゃんと知っているのは、この通信委員会なのです。本当はこれがジャコバンクラブの実権を握っているわけです。

さらに、国政レベルでも同じようなことが起こります。今まで王権に向かって、民衆が何らかの通信を送るということは余りなかったわけです。しかし、全国三部会招集以後、人々は自分たちの国民議会に対する支持であるとか、賛同であるとか、あるいは自分たちの訴えであるとかいうことを議会しかそれを受け付けてくれないと考えるようになります。そこで、議会へ向かって、どんどん情報を送るようになります。これが膨大な量に上ってまいります。そこで、議会に集中したものを仕分ける作業が必要になってくる。全部読み上げていたら日が暮れてしまいます。だから、この中で最も重要だと思われるものを仕分けする作業をする委員会ができます。これが通信委員会というところです。民衆の側がさまざまな通信を送ります。その中で最も重要だと思われるものを、この委員会が仕分けしまして、それを議会で読み上げるということになっております。ですから、議会議事録を見ますと、最初にいろんなそういう訴えを読み上げる時間を取っておりますけれども、これも全部ではないということです。だんだんこの通信委員会が実権を持ち始めるのです。つまり、どれが大事かということを判断できるのはここだけなのです。さらに、非常に危険な動きが出てくる、つまり反革命の動きが出てくるということになりますと、それを連絡する情報が議会へ送られる。そうすると、直ちにそれに対して警察、あるいは軍隊を派遣しないといけないということになります。それをやるために通信委員会が探索委員会となってきまして、これは警察権と軍事権を両方持つようになるのです。後の公安委員会という、ロベスピエールの段階で有名になる委員会のいわば先駆的な形態が既にできているわけです。これは余り日本で知られておりません。つまり情報というものが政治をつくり出していく、あるいは権力をつくり出していくということの1つの大きな事例だろうと思います。

その中で、先ほど申しましたように、1792年4月20日に、フランスは無謀にもオーストリアに対して宣戦布告します。オーストリアにプロイセンも荷担し、さらに後にはイギリスも加わる対仏大同盟が結成されていくわけです。ヨーロッパ全土を巻き込む大戦争になっていくわけです。さらにナポレオンが没落するまでの20数年間、フランスだけではなく、ヨーロッパ全体、さらには植民地も含めての大戦争に発展していったわけです。その中で、当然のことながら、軍事情報の重要性はだれで

も痛感していたということは言えます。

しかし、それはあくまでもまだ馬や早馬といったものに依存せざるを得ない。常にタイムラグの中にいたわけです。ましてや海外植民地におけるさまざまな紛争関係、イギリスとの紛争が起こりますから、こういったことについての情報は数カ月かかるだろう。船で情報を送らざるを得ないですから。そういったことを私たちは頭に置いて見る必要があると思います。地方・辺境は、中央の指示が届かない限り、自分たちの判断でやらざるを得ない。制度的には中央集権が進むけれども、情報を媒介とする中央 - 地方関係は、アンシアンレジーム期と変わらなかったのです。

その中で腕木信号機というものが登場してきまして、1793 年 7 月 12 日に、クロード・シャップという人が、国民公会のもとにある公安委員会の命令で公式実験をやります。これが大成功をおさめるのです。なぜこの発明を実施に移すことになったか。国民公会のジャコバン派有力議員であるラカナル Lakanal（Joseph, 1762–1845）は、つぎのようにいっています。「腕木信号通信の確立こそ、フランスが一なる共和国を形成するには余りに広すぎるという考えを広めてまわっている輩に対する最も良い回答である。通信は、距離を短縮し、いわば、膨大な人々を一点にまとめ上げることになるのである。」ラカナルは、まさに腕木信号機を国家のあり方に結びつけて考えております。

国民公会は、迅速に軍事情報を得るために、特にオーストリアとの戦争が続いている北部戦線の情報を得るために、リールまで腕木信号通信線を敷設せよということを命令します。7 月 26 日にラカナルが国民公会で報告をいたしまして、パリとリールの間に敷設が決定されます。決定したからといって簡単にポンポンとできるわけではないのです。お金がまずありません、人がいません、材料がありません。大変な苦労をしながら、ようやく 10 カ月以上たって 1794 年 4 月にパリ・リール線が開設し、交信が開始されたのです。

この間、この腕木信号機の通信線の設置を決めた公安委員会の中心であったロベスピエール派は、テルミドールのクーデターで没落しますけれども、この交信関係は続きます。テルミドール以後、臨時政府体制であったのが、95 年 10 月 26 日には総裁政府ができました。敷設開始以来、総裁政府設置までの 1 年ほどの間が私の研究対象であります。先ほどごらんいただきましたように、その後も全国腕木通信線が敷設されました。これが 1852 年から 54 年ごろに、国内ではモールス式の電信機にかえられて、腕木信号機は撤去されていきました。腕木信号機は、戦場や植民地を除いて全然残らなかったわけです。

腕木信号機につきましては、先ほど申しましたけれども、ごらんいただいたああいう形をしておるということは大体おわかりいただいたと思いますが、その性格を申しますと、一貫して国家情報の伝達システムです。民間利用は一切認めませんでした。何度も民間利用が提起されました。提起されたのですけれども、これは一切認められませんでした。有名な論争がありまして、これは国家の独占ではないかということが議会で問題になるのです。それに対しまして、いや、民間の独占より国家の独

占のほうがもっといいというわけのわからない議論をいたしまして、排除されました。結局、モールス式の電信機が導入されるまでは、民間人は全く利用できなかったということです。要するに国家意思の形成伝達過程のメディアであったということをまずご承知おきいただきたいと思います。

ここから、きょうのお話の1つであります中央・地方関係、あるいは地域との関係がこの交信記録からどう読み取れるかということでここに書いたわけです。まず、資料的価値として、重要であると言うことを指摘しておきたいと思います。これまで地方に派遣議員が派遣され、その膨大な報告書がアルフォンス＝オラールが編集して『公安委員会』となります。全26巻、一冊が500頁を越えるものです。さらに戦後これの4冊の補遺版がでました。革命期の中央地方関係を知る上で重要な資料集です。公安委員会がなにを審議し、どのような指令を送ったか、特に敵との最前線、反乱地域での情報は大変重要です。パリ−リール間の腕木信号通信線の交信記録でわかることは、オラールの資料集にほとんど収録されていないリールという一都市の情報が中心であることです。ですから、中央−地方関係という抽象的な取り扱いをせずに、地方都市の動きとパリの中央の動きとが明確にわかるということです。

図9は、パリからリールに送り出された通信文の内容をまとめたものです。その中でパリからリールに向かって送り出されたのは大体401件です。それ以外にもいろいろな通信があるのですけれども、これは中身と余り関係ない、信号がまだうまくいっていない時期ですから、第何番目と第何番目は何だというようなことを問い合わせる。それに対してまた第何番目と第何番目はこれこれであるという返信があるので、これは全部除いての話なのです。365日で考えると、大体1日1件。それに対してリールからパリは197件で、大体200件ぐらいで、2：1ぐらいの割合だとお考えください。

その中で、大体どういう内容が送られていたのかということをここに書いております。図9をごらんいただきますと、青い部分がございます。MとかEとか書いてありますけれども、これは軍事情報（M）、それから反乱情報（E）です。ヴァンデの反乱とか、国内でもさまざまな反乱が起こっています。こういった情報がリールに向かって伝達されているわけです。大体50%ぐらいを占めています。ですから、200通ぐらいがこれに当たるということです。その中で軍事情報といっても、例えば別の方面軍がライン川を渡河したであるとか、あるいがピレネー方面軍がスペイン軍を破ったであるといったような情報が伝えられます。それから、ヴァンデの反乱がどこまで広がっているといったような情報であります。

次に、赤い部分です。PDRとまとめています。これは要するにポリティックス（P）、つまり公安委員会、国民公会の動きです。さらに新しい憲法、あるいは新しい法律・布告といったもの伝えるために、この腕木信号機を使っております。それから、ディプロマシー（D）は、外交、ディプロマシーでは、例えばプロイセンやスペインとの単独講和を結ぶ、そういった講和条約を結んだといったような情報が伝わります。

この時期には、さまざまな地方に、地方長官ではなくて議員を派遣しておりました。議員が各地方に派遣されると、各地方における最高権力を握ります。あるいは軍隊にも派遣します。いわば軍隊に対するお目付役の政治委員のような形で送り出されます。公安委員会は、彼らに向かってさまざまな指示をするといったようなことで、これがパリからリールに向かっては大体44%を占めております。

あと、このクリーム色の部分、Sと書いてありますけれども、これは7%ぐらいです。これは食料問題であります。パリは常に飢えており、飢えるとパリでは大暴動が起こりますから、常にリールや、あるいは後で触れますベルギーからさまざまな食料を搬送してくれというような指令を送るわけです。

それに対しまして、今度はリールからパリへの信号内容がその次にございますけれども、軍事情報や反乱情報はそれほど多くなくて、26%程度であります。一番多いのはやはりポリティックスといいますか、あるいはディプロマシーでありまして、例えばリールで起こっているさまざまな民衆の動きが伝達されています。それから、パリと比べて一番違うところはクリーム色の部分、つまり食料問題が非常に多いのです。26%ぐらいですか、これだけの量が送られております。つまりパリとリールとの間の関心の違いが非常に出てくるわけです。つまり、パリのほうは、ちゃんと食料を送れといったような指令を送るわけですけれども、リールに派遣された議員のほうからは、いやいや、なかなかそうはいかないのだという事情を送らざるを得ない。つまり、たとえ全権を握っている派遣議員といえども、人々が飢えたり暴動を起こそうとしているのを目の前にして、それでもパリへ食糧を送れというわけにいかないという事情を言わざるを得ない。しかし、いくら実情を述べたてても、パリのほうは「そうですか。じゃあ少し手を緩めましょう」とはできないという、その間のズレがここに出てくるわけであります。

こうしたことを私たちは、ある意味で言うと最も重要な問題としまして、1795年9月・10月の事件が起こります。これは何かと申しますと、先ほどから申しておりますように、パリとリールの間の腕木通信に想定外の割り込み・横取りが起こったという事件です。本来的に言えば、腕木通信の当事者は、公安委員会と地方派遣議員だけであります。腕木通信の発信・受信に突然リール市が割り込んでくるのです。

1795年9月30日に、リール市の役員から公安委員会にいきなり通信が送られております。これは絶対あり得ないことなのです。10月2日、リール市の役員から公安委員会に向かって送られています。先ほどから何度も繰り返しておりますけれども、この腕木信号機の通信系は、これはあくまでも国家意思の伝達・形成のためのシステムであって、こういった地方の自治体が介入する余地は全くないわけです。にもかかわらず、こういう信号が送られているという記録が残っているので、私はちょっとびっくりしたわけであります。

それから、今度は次に、同じ10月2日の4時34分に、今度は公安委員会がリールに対して送っています。10月18日、リール市当局から公安委員会に向かって、とにかく食料が足らない、飢饉が起

こりそうな状態なのだ、何とかしてくれということを送るわけです。

それに対しまして、公安委員会は割と冷たいのです。1つは、まず不快感があったわけです。つまり、リール市の自治体からこんなものを送ってくるとはけしからんということです。規定に反している。これが第1です。第2番目は、幾らそんなことを言われたって、この時期は実はパリではヴァンデミエールの大反乱が起こっているときなんです。王党派の大反乱が起こっておりまして、公安委員会としても、リールの一々のことに簡単に応えられるような状況ではなかったわけです。そういった事情もあります。

ともかくこんな異常な通信のやりとりをしたということは私は大変興味深く、なぜ、だれが、どのようにしてということに着目いたしました。要するに、こういう国民国家が成立している中で、いわば中央と地方との間の情報通信関係が確立していく。その中に、予定していなかった自治体が介入してくる、あるいは横領してしまう、こういった事態を私たちはどう考えたらいいのだろうかということです。

だれがやったのだろうかという犯人捜しをやりまして、まず仮説の1といたしまして、これはリール市当局である。これは署名人ですから明らかにそうだということはわかるのですが、何度も情報を上げています。特にここで言っていることは、食料暴動が起ころうとしている、我々としては防ぎ切れないということ訴えているわけです。

それから、2番目の仮説としまして、どうもリールにいた派遣議員も一枚かんでいるのではないかと私は推理しております。まだこれは全然証拠はありませんけれども。なぜかと申しますと、派遣議員から公安委員会に対しまして何度もその前に、つまり9月・10月事件が起こる前に、公安委員会に対して、リール市のほうからこういうことを言われている、何とかしてくれということを言っているわけです。その中でも非常に有力なバラスなんかも言っているんですけれども、パリの側は十分応えていない。派遣議員としては、自分が言ったところで、公安委員会は言うことを聞いてくれないようだという判断をしたのではないかと。これは私の勝手な推理です。リール市に対して、おまえたちがやれ、私が言ったってパリは全然聞いてくれないということで、リール市の名前を使ったのではないかということです。

それから3番目に、リール市と派遣議員が共謀したところで、実は通信ができないのです。なぜかというと、暗号簿を持っているのはリール市駐在の腕木通信の責任者であるアブラム＝シャップという人なんです。暗号簿がなければ一切伝達できないわけです。ところが、アブラム＝シャップという人は、先ほど申しました腕木通信を発明したクロード＝シャップの弟なのです。アブラム＝シャップは、リールという当時の辺境に追いやられて、どうしたらいいかわからんという状態でした。当時、リール駐在の派遣議員がいましたので、彼らのところへ行って、どうしたらいいでしょうかということを尋ねるわけです。これからは、ここでつくらなければいけない。人も集めなければいけない、お

金も滞りがち、それから資材がない。こういった中で何とかしないといけませんが、どうしたらよろしいでしょうかとお伺いを立てたら、派遣議員は信号機の機材の有用性について詳しく説明するため、リール市の民衆協会に出席することが非常に重要であると言います。そのために、アブラム＝シャップは、兄クロード＝シャップに対して、腕木信号機がどれほどみんなに有用かということを説明するための資料を遅れということを要望しております。その後、アブラム＝シャップは、民衆協会に出席し、機械の有用性を説明して、2〜3人の通信所の吏員を選任し、そして機械が作動し始めたときにリールの町の人が恐怖を抱かないよう、不安を打ち消すように働きかけてくれというようなことを頼んでいるわけです。ですから、このアブラム＝シャップは、その土地に受け入れられないといけないということを考えたと思います。彼はもちろん中央から派遣されているわけですけれども、リール市の側に立たないといけないというふうに思ったようであります。

これが昂じて、あたかもアブラム・シャップは市当局の、自治体役員の一員であるかのように行動します。中央からこんなことを言ってきましたというような通信をそのまま市当局に持っていくのです。もちろん派遣議員にも持っていきます。でも、その写しをちゃんとリール市のほうに伝えているわけです。こうした中央・地方関係というものを制度史的に考えますと、先ほど申し上げておりますように、公安委員会が国民公会に頼んで議員をどんどん派遣する。議員は全権を握る。そしてそこで革命の法律を実行させ、そして革命的な方向へ向かって、例えばその土地におけるさまざまな政治・行政を改革していくといったような任務を持っているわけです。それだけを見ると私たちは中央の意思が地方に貫徹したというふうについ考えがちなのですけれども、派遣議員自体が中央の手先という性格ももちろん非常にありますけれども、実は地方の側の利害というものを伝達しないといけなくなってきている。こういう中央・地方関係の複雑なありようというものが、この腕木信号機の通信を見る中で出てくるのではないかと思ったわけです。

つまり、国民国家ができるときに、私たちは中央集権体制をつくる。その典型はフランスだ、その出発点はフランス革命だったとつい考えがちなのですけれども、そう単純ではないのではないか。そしてその中で、特にリールとパリとの間でこれほどまでに情報のやりとりがほぼ毎日のように行われていくようになりますと、何が起こってくるか。よく考えてみると、国民国家が距離とか面積といったような限界を越える手段を手に入れたのではないか。つまり情報通信という手段というものは、単に早く伝えるというだけではなくて、国民国家というものが、広大な領域に広がっているさまざまな利害や、あるいはさまざまな要求や、あるいはさまざまな状況というものの情報が瞬時にして伝えられるようになってきたときに、いわば私たちの常識である国民国家のある種の物理的限界というものを越える方法が始まったのではないだろうかというふうに考えたわけであります。これが中央・地方関係ということで、皆様の問題とちょっとずれるかもしれませんが、こういうことを私は考えております。

## 2. 腕木信号機と帝国

最後に、腕木信号機と帝国の問題にこれはどうかかわるのかということです。1795年3月25日、公安委員会に向けて地方派遣議員が送った腕木通信ですけれども、リール市当局から公安委員会に対して次のように述べています。徴発を行おうとしたにもかかわらず、、サントメというところは物資の集積地なものですから、たくさん穀物を持っている、そこから持ってこいと公安委員会に言われていたのだけれども、サントメ市は保有する穀物を提供することを拒絶したというのです。サントメというのはリールから西のほうであります。派遣議員が3,000キンタル、1キンタルが約100キロで、重さの単位ですけれども、この穀物をベルギーで徴発することを許可した。しかし、既にフランス軍の占領下にありますから、ベルギーにある民政軍政当局が、穀物の搬送に反対している。緊急にこの障害を取り除いていただきたいと述べたてています。私はここで初めてベルギーという存在に気がついたわけです。なぜここにベルギーが出てくるのだろうということです。

1795年3月26日、公安委員会は速やかに次の2つの委員会通信を送達するはずであるという通信がリール駐在派遣議員のもとに行くのです。第1に、サントメ市に対して、リール市のために徴発を実行すること、第2に、リールにベルギーの穀物を搬入することという命令を送っております。

それから次に、これは後にナポレオンのいわば重要な補佐を行いましたカンバセレスという人がいますけれども、彼の回想録がありまして、ヴァンデミエール13日反乱よりも数日前にということですが、1795年10月1日、国民公会は、ベルギーとリール地方の併合を宣言した。カンバセレスは、この併合決定は、共和国の利益との関係で考えると何の問題もないと言っているのです。そのような関係の中でそれを実行することが賢明であったか、政治的であったか、私にはその点は微妙なことのように思われます。ただ、カンバセレスは、重要な地位というか、公安委員会の一員ではありますけれども、政治決定ができる状況にはなかったのかもしれません。

そこで、もう一点、ここでちょっと注目してほしいのですが、恐らくフランスは自然国境論を有しているであろう。この自然国境という考え方は、フランス革命の中で非常に重要な概念として登場してくるのです。つまりフランスが戦争をする目的の1つと言っていいでしょう。1つは、これは革命戦争です。つまりオーストリアだとか、あるいはプロイセンであるとか、あるいはオランダだとか、ベルギーだとか、こういったところは皆、封建制のもとに苦しめられている。我々はそれを解放するのだというのが革命戦争の目的であるというふうに言っているわけです。これが第1です。

それから第2に、これはアンシャン・レジームからも続くのですけれども、いわゆる自然国境論。つまり、ピレネーであるとか、あるいはアルプスであるとかといったものが自然の国境である。そうすると、一番問題になってくるのは北方であります。ずっと平原でありますから、どこに自然国境を求めるかというのは悩ましき問題なのです。これはある意味で融通無碍であると我々は考えざるを得

ないということをまず指摘しておきたいと思います。

フランスにおける革命研究の泰斗ゴドショーによりますと、ベルギーを占領した北部方面のフランス軍が、1793年9月15日に、敵地における全司令官に対しまして通信を送っているのです。占領地で人質を取れ、税金を徴収しろ、軍隊の糧秣に必要なあらゆるものを徴発しろ、それからフランス国民にとって有用なるものをすべてフランスに搬送するよう命じたというわけです。つまり私たちは、軍事的なオーストリア軍と戦って一度は勝って、そしてまた侵入されて、また押し戻して、ベルギーを取り、そしてさらにオランダを取ったという軍事的な作戦についてはある程度承知していますけれども、一体どのような占領政策を行ったかということは、ほとんど日本では研究がないわけですが、さすがにベルギーですとかオランダではこういう研究がありまして、私もそれを読んで、はたと納得がいったわけです。ゴドショは、またこういうふうに書いています。これはベルギーを含む被征服国の富を抽出するというのです。エクストラクシオンというのですけれども、その中でバラス（1755–1829）が一番活躍するのです。バラスという人は腐敗しているということで有名なのですが、御用商人と非常に関係を持っているというわけです。彼の際限のない金権体質を満足するために、こういうことをやったのだというわけです。

さらに、最後に、今度は非常に重要なのですけれども、フランスで実行されておりましたマクシマム、すなわち最高価格決定です。つまり、いろんな物価の最高価格を決定して、これ以上のものはやってはいけないということをやったわけです。これは後で説明します。それと同時に、フランスでしか流通していなかった少額紙幣のアッシニアを、ベルギーを占領しますと、強制的に流通させます。ベルギーは今までは当然フローリンという通貨が通用していたのですけれども、この通貨を全部回収しまして、アッシニアを強制的に流通させるという政策をとります。

北部方面、当時オーストリア領だったわけですけれども、現在のベルギー、それからオランダへ向かって1792年4月20日に宣戦布告して、フランス軍は北部方面をずっと上がっていくわけです。ついにベルギーを侵略します。この後の事態が、後でも申し上げますけれども、国民帝国といいますか、国民国家が成立するのと同時に帝国がつくり上げられていくという同時並行的なプロセスを歩んだのではないかと思います。

当時ベルギーを占領していたのは、フランス北部方面軍、サンブル＝エ＝ムーズ方面軍ですけれども、まず占領地に対して、要するに徴用といいますか、徴発をするわけです。牛とかヒツジだとかいったものを現地で徴発します。当時、軍隊は全く補給線を持ちませんから現地調達をします。恐るべき徴発、徴用が行われていくわけです。「戦争でもって戦争を養う」というのが、それまでの軍隊の補給の考え方でした。

1794年、95年、ベルギー地区でフランス北部方面軍だけで殺された家畜の中で雌牛は非常にたくさん殺されて食べられています。去勢牛、ヒツジも徴発されて、屠殺され、フランス軍の食糧となっ

たのです。こういった膨大な占領地区に対する徴発、徴用が行われたということをちょっと頭に置いておいていただければと思います。

こうしたベルギーに対する占領政策というものを、私たちは十分考えてみますと、かなり重大な問題が浮かび上がってきます。それ以前に、アヴィニョンというところがありますけれども、ここは教皇領であったのですけれども、1792年にフランスに併合されてしまいました。そのときの理屈が、アヴィニョンの住民がフランスと合邦したいという決定をしたということで、フランス領に組み込んでしまうわけです。私はそれを見て、どうも国民国家の成立ということと帝国、少なくとも異民族支配であるとか、あるいはこれまでの国境を越えた異なった領域に対する支配を広げていくというその志向性は、むしろフランス革命のときから始まっているのではないか。もちろんナポレオン期には明確にナポレオン帝国ということでわかるのですけれども、フランス革命期においても、まず先ほど申しましたアヴィニョン、あるいはヴナスク伯領も教皇領だったのですが、ここも接収・併合してしまいます。次にやったのが、ライン方面におけるドイツのさまざまな諸侯の持っていた領土、これも接収してしまいます。これは要するに国境という概念でもってつくり上げられた措置であったと言うのですけれども、その後のベルギーのことを私は考えておりませんでした。じつは、これが、ナポレオン帝国へつながっていく論理だったのです。つまり、そこの住民たちが望めばその土地をフランス領にしてしまうことができる。そしてそこの人々をフランス国民にしてしまう、こういう考え方ができるようになるのではないか。

それから、自分たちが支配している地域において、フランスにおいて通用しているさまざまな諸制度というものをそこに移植することに何の痛痒も感じない。もちろん最初はベルギーの場合ですと占領政策の中でつくられていくのですけれども、しかし後々には、このベルギーを併合いたしまして、フランスと同じく県をつくります。その中で、フランスで通用しているさまざまな政治・行政制度をベルギーで実行するということが当たり前になってくる。

こうなってきますと、ナポレオンとの距離はそんなに遠くない。もちろんそれは軍事力の問題では差があったかもしれませんけれども、ナポレオンといえども一将軍にすぎなかったわけでありまして、この占領政策、さらにその後に起こってくるフランスへの合邦という路線はナポレオンも当然熟知していたし、それをイタリア戦線で展開していったということは当然考えられるわけです。

そうなってきますと、私は、国民国家の成立ということ、そしてその中における論理と、それと帝国の論理といいますか、これは決して断絶しているとは考えにくい。それを鋭く指摘されたのが山室信一さんでありまして、山室さんはさすがに鋭く「国民帝国」という言葉を使っております。要するに、国民国家が成立した後に帝国段階を迎えるというハンナ・アーレントを批判して、そうではない、ほぼ同時的に進行していくと。山室さんはドイツであるとか、その他、19世紀のイタリアであるとかというものを考えておられるようですけれども、私はもっとそれを前倒しして、フランス革命におけ

る国民国家の成立というものと、これはいわば相即的なものとして考えられないのだろうか。これはまだあくまでも私の推論にすぎません。しかし、そういうことを考えていく1つの手がかりとしてベルギーというものを視野に入れる必要に迫られたわけであります（「歴史的過程に沿ってみれば、アーレントが問題とした当のドイツにおいても植民帝国主義は国民国家の形成と軌を同じく成立しているのであり、けっして国民国家の崩壊によって植民帝国主義が成立したとはいえない。むしろ、ヨーロッパの植民帝国主義の形成に拍車をかけたのは、後述するように、ドイツやイタリアの国家統合を契機としており、国民国家と植民帝国とがほぼ同時期に相互補完的に形成されていったとみるほうが事実に合致しているように思われる。」（山室信一「『国民帝国』論の射程」山本有造編『帝国の研究――原理・類型・関係――』名古屋大学出版会、2003年、88–90頁）。

ベルギーで作成された集計表によると、各都市で、小麦、ライ麦などを割り当てまして徴発するわけです。徴用していくわけです。後には、オーストリア領フランドル期の年貢・税金に加えて、フランスの税金もかけられます。

ところが、ベルギーがいくら豊かである、といってもいろんな問題がありまして、そんなに簡単に割り当てられたものを送り出せない。あるいは場合によって抵抗もありますから、例えば、オッセンデーというところがあります。そこは1万キンタルを割り当てられたのですけれども、ゼロしか送り出していないものですから、これは徹底的に取れということになっていくわけであります。それにプラスしまして、そこに駐屯している軍隊が勝手に徴発をやりますから、ベルギー国民にとっては大変な苦しみになったことは間違いない。

しかも、先ほど申しましたように経済的な視角から見ますと、税金を維持する。さらに軍事税をかけます。しかもそれをフローリンで、つまり正貨で徴収します。そのかわりに、一定程度のお金を払う場合にはアッシニアで払うという政策をとっていくわけです。これが1つ。アッシニアはフランス国内においてフローリンとの間で為替で決められておりまして、10フローリンがアッシニア18ぐらいの交換比率なのです。しかし実際は、インフレーションが起こっていますから、アッシニアはその当時34%程度の価値しか持たないわけです。その結果、ベルギーの人にとっては大変な損害をここでもたらされたわけです。アッシニアというのは要するに教会財産を担保としまして信用を得て、最初は利付き債券として売り出すのですけれども、人々の中で大変な需要が出てきます。とにかく穀物がないとか、いろいろな問題がありますから、それで紙幣化していくわけです。その結果、本来持っている額面から見ますと恐るべき低落を遂げていきます。ベルギーでアッシニアを強制流通したときには30%ぐらいの額面、例えば100リーブルなんていうのをもらっても、実力は34リーブルぐらいしかない。でも、これを100リーブルで買うわけですから、フランス側にとってはすごい格差でもってつくり出されるいわば暴利をむさぼっていったわけです。これによってベルギー経済は大変な打撃を受けていくことになります。

こうしたことを視野に入れていった場合、単に軍事占領するだけではなくて、後には併合してしまいます。この併合については大変おもしろい話がありまして、先ほど申し上げたフランス側のゴドショーに言わせると、余りにもベルギーの人々にとっては耐えられないから、フランスと一緒になればフランス人並みに扱ってくれるのではないかということで、彼らは併合してくれという要請をしたというふうにフランス人のゴドショーは言っているわけです。しかし、ベルギーのほうの研究所によると、そんなことはない。最初からフランスは自分のところの領土するために侵略してきているのだから、そんなことをベルギー人は間違っても言っていないと対立するわけでありまして、私はこの時期のフランス・ベルギー関係、あるいはフランス・オランダ関係は大変おもしろいなと思っています。そして、単なる占領政策にとどまらず、フランス革命、革命戦争を契機として、体系的な帝国政策に発展していったことも見て取ることができます

腕木通信の交信記録をきっかけにベルギーの問題にまで、そして占領政策、「国民帝国」の問題にまで広がってしまいました。十分論じていけませんでしたが、ナポレオン帝政期以後のフランス帝国と腕木信号機とが有機的に絡む、というだけではなく、その交信内容からして、帝国の問題が早くから出現しているということもおわかりいただけたと思います。

## 終わりに

中央・地方関係を考える視点の中に、距離とか面積を越えていく、克服していくものとしての情報通信網というものがほぼ同時性を持ってくるということを考える必要があるように思われます。また私たちは単純に中央・地方関係というものが中央からの一方的な支配というふうに考えるのはちょっと問題があって、地方からのさまざまな意見も同時的に送り込まれていく。この両方の相互性というものを視野に入れて考える必要があるのではないかということが第1点。

それから第2点は、帝国という視点を抜きにしてフランス革命というのは考えられないのではないかということを、腕木信号機の通信の内容から私なりに読み解いていったということでございます。

余りにも雑駁な報告で、かつ初めての話も多かったと思いますので大変おわかりにくかったと思いますが、これから皆さんのほうからいろいろご質問なりご批判なりをいただきながら、私なりの研究に資していきたいと思います。どうもありがとうございました。

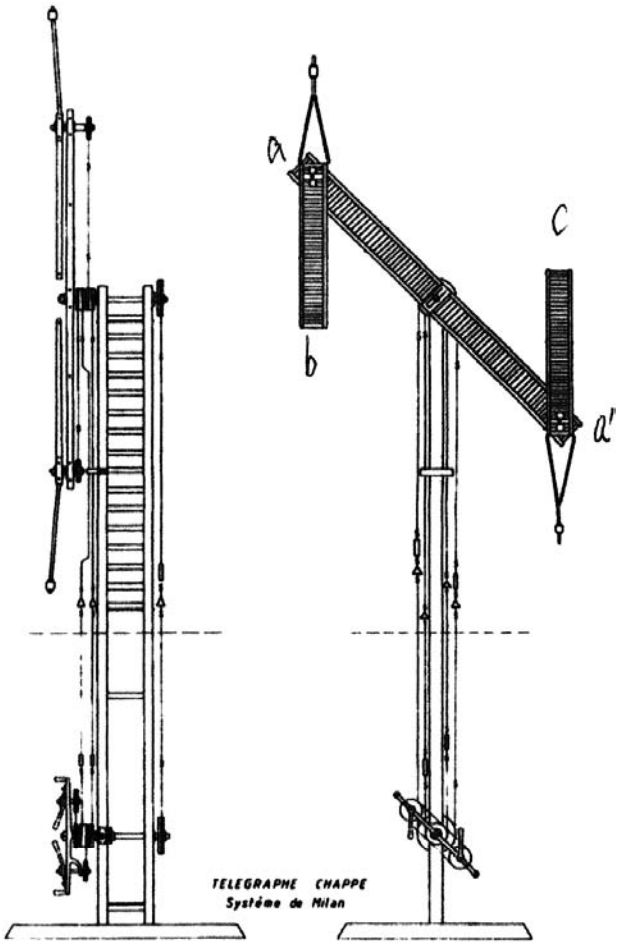



図１　腕木信号機の模型（ミラノ線、1804 年）

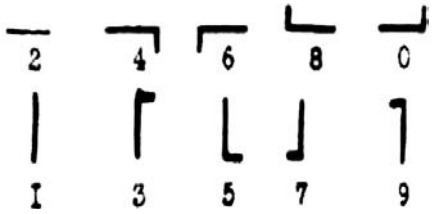



図２　腕木信号の形と数字の対応

図３　ストップ信号（図は 73 という二桁数字）

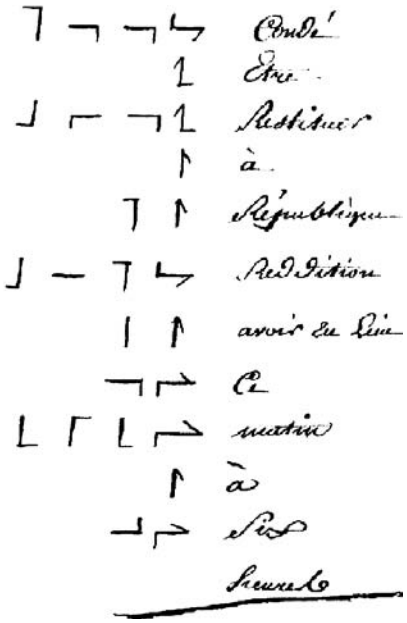
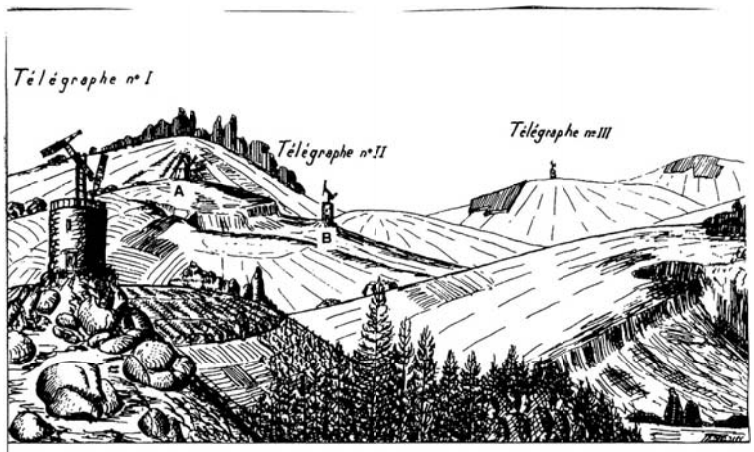


図４　コンデ（北仏）奪回の急報（1794 年 8 月 30 日）




(A. Jamaux - 1967 - op.cit. t.1 - Fig.66)

*Les télégraphes "détachés dans l'atmosphère".*
Le télégraphe n° II est implanté en B car en A, il ne se détacherait pas sur l'horizon à cause d'une colline plus élevée à l'arrière-plan ; de plus, l'angle de déviation formé par n°I - A - n°III serait trop important.

図５　腕木信号線の模式図

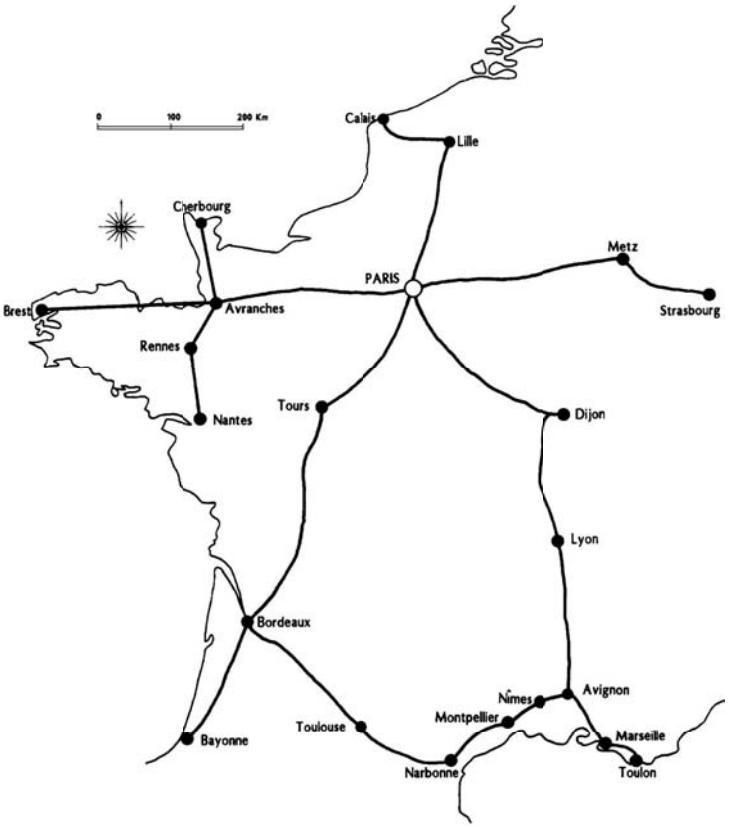



図 6　1835 年の腕木信号線全国地図

出典：G. Lefebvre, *La Grande Peur de 1789*, Paris, 1932, pp. 198–199.

図７　1789 年７月の「大恐怖」地図（G. Lefebvre, *La Grande Peur de 1789*, 1932.）

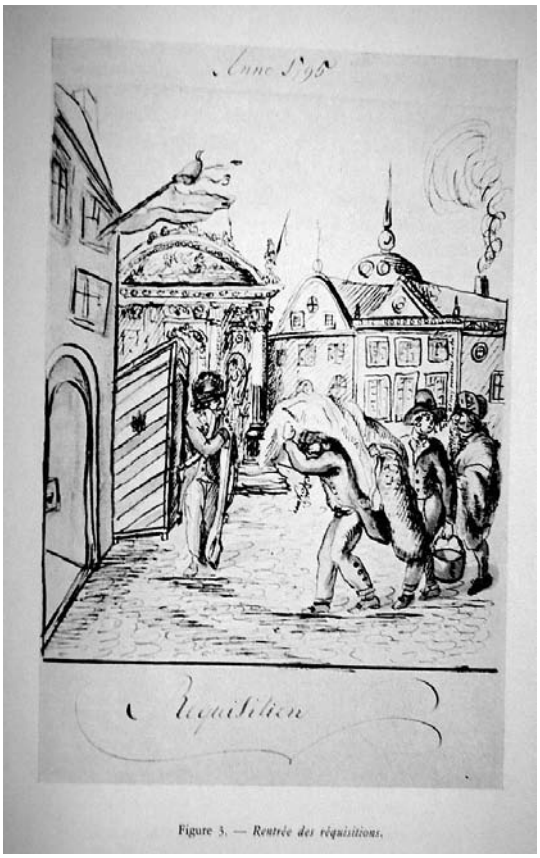



図８　仏軍占領下ベルギーにおいて徴発物資を搬入させられている。

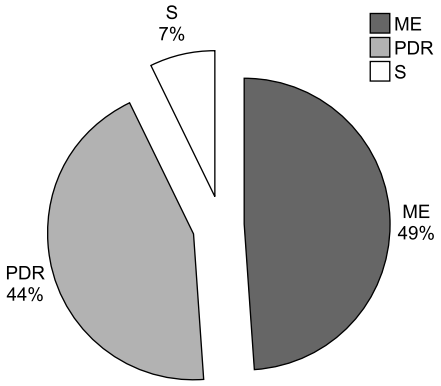



図９　パリ－リールの交信内容

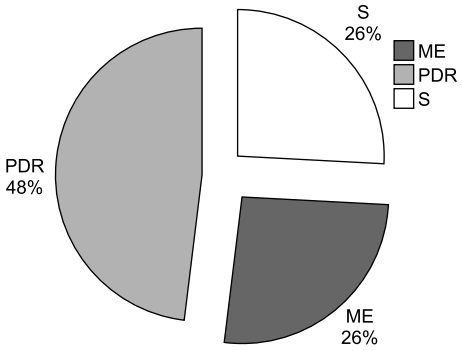



図 10 リール－パリの交信内容